

御土はんのう

第32号



飯能市指定文化財「西光寺板石塔婆」(板碑) 修復移設成る

板碑は中世に造られた石塔の一種で、仏を供養するという卒塔婆の性格をもつものです。

関東では長瀬町、小川町などで産出する緑泥片岩を使ったものが多く、武蔵型板碑と呼ばれています。弘長元年(1261)銘のものが市内で最も大きいものですが、二つに折れていたため、修復をしたのち、

一群四基を下におろし、覆屋を設けましたので拝観しやすくなりました。

右から順に弘長元年(1261)2.48m、正元二年(1260)1.81m、正和四年(1315)1.63m、正和元年(1312)1.56m 四基ともに阿弥陀三尊が刻されています。

目次

- ◆武蔵野鉄道開設由来……………浅見徳男 2
- ◆飯能戦争についての新たなイメージ
～特別展「飯能炎上」の成果から～
……………尾崎泰弘 3
- ◆邦楽と飯能地方の祭り囃子……………石森裕也 4
- ◆渋川市赤城町の文化財探訪……………浅見初枝 6
- ◆浅草観音発祥の地……………小見山 進 8
- ◆随筆 街路灯散見……………関根貴志 9
- ◆編集後記……………坂口和子 10

武蔵野鉄道開設由來

浅見徳男

一、西川林業

飯能の地場産業として、長い間地域経済を支えてきた西川林業は、飯能市の西北部に広がる2ヘクタールほどの山林から産出される林産物を、大消費地である江戸（東京）へ供給することで成り立っていた。

この林産物の内容は、建築用の構造材といわれる木材と、食物の煮炊きや採暖に使う燃料材、製品としては薪とか炭である。

一般的に日本各地の林業地での林産物の生産額の割合は、構造材が3分の1、薪炭材が3分の2といわれている。西川林業も例外ではなく、薪炭はもともと主要な林産品であった。これらの生産品を消費地に運ぶには、ここに住んでいる人なら「かつて木材を筏に組んで、千住まで運んだ」という風物詩として運搬の様子を聞き知っているであろう。ところが燃料材については、あまり語られることもなく、言い伝えられていない。燃料は濡れてしまつては使えない物にならないので、生産地から川越まで陸送し、川越から舟運を使って江戸まで運んでいた。

二、道路改良事業

明治維新が成つて、和魂洋才、文明開化の世になると、西洋の機械や土木技術が我が国に入つてきて、埼

玉県でも道路改良事業が盛んに行われるようになってきた。

西川林業に携わる人々も、燃料を運ぶには道路利用しなければならず、急峻な山道や川を渡る必要など日頃苦勞の多いことから、道の改良には期待し県議会の動きには関心をもつていたようである。

明治23年の県議会で、県内に19本の一等公益道（主要道）が決定され、そのなかに「大宮郷（東京道）（秩父大宮・横瀬・山伏峠をこえて名栗・原市場・飯能・水雷・豊岡・所沢・東京）という路線が入っていた。ところが吾野谷筋からの陳情などもあって、明治28年11月の県議会で、大宮・東京道のルートをも、中間から横瀬・吾野・飯能という変更案が可決されている。

ここで、名栗谷筋と吾野谷筋の住民が対立することになってしまったが、この時点では路線の変更で、工事が始まるというのではなかった。で、対立が先鋭化することはなかった。

しかし、明治43年の県議会には、秩父資源開発として道路開削案が上程された。それによると、正九峠・山伏峠・粥仁田峠の三線同時に測量する案と、正九峠一本に絞つて測量する案が提案された。当時、政友会の重鎮で議長の職にあつた東吾野村出身の小林拾三は、かねてよりの念願であつた正九峠開削案の実現にその政治力を使つて可決するに至つた。

三、地域住民の対立

議決はされたものの、地元住民の対立は収まらず、双方の合流点でもあり、経済的にも結びつきが深い飯能市街の重層的にも結びつきが深い調停を依頼したのが、飯能で生まれて横浜財界で活躍していた平沼専蔵であつた。専蔵は立志伝中の人物で、明治23年の横浜市内額納税者として、1400円（市内で2番目）と、彼の地でも財界の大家であつた。また、山岡鉄舟の剣術の弟子でもあつたことから、谷中の全生庵（鉄舟が建てた寺で彼の墓地もある）に鉄舟没後、彼の顕彰碑を建てている。この専蔵が仲立ちとなつて、名栗・吾野両谷筋の有力者を飯能へ呼んで、専蔵も横浜から飯能へ出向いて調停に当たつたという。

「専蔵は何回も飯能へ来た。入川から馬車に乗つて来たのを、子供の時見た覚えがある」と、明治後期に生まれたという古老に聞いたことがあつた。

仲介を両谷筋の人たちが納めたのは、飯能から東京へ向かつて鉄道を敷くという条件であつた。林産物を飯能市街まで運べば消費地へ短時間で大量に運搬できるということから、いままでよりどれほど努力が省ける、いままを考えた納得であつた。

四、鉄道開設

明治44年2月4日、飯能の発起者が大善して横浜の平沼家へ向かつた。小能五郎、金子忠五郎、大河原浅吉、金子周策、小川善五郎、坂元喜一な

ど、そこで最終的な申請書類の確認が行われて、国への認可申請が出されている。

その年の12月には株の公募が始められ、百万円の資本を集めることにし、大正2年4月23日付けで工事着手届が総理大臣宛に出され、工事期間2年ほどで総延長27マイル余（約43キロメートル）の工事が完成した。その資金調達には現在の飯能在住の人と発起者の平沼専蔵を含めて、実に40パーセント余を集めている。

また、飯能から東京に向かつて敷かれた鉄道ということが言えるであろう。大正4年4月、ついに武蔵野鉄道は開通した。飯能から池袋まで駅の数12、蒸気機関車を動力として所要時間4時間46分・4月18日に飯能駅頭で行われた開通式典は、この町始まつて以来の盛大なものであつたという。初代社長の平沼専蔵は大正2年に亡くなり、この時は2代目社長の小能五郎が引き継いでいた。小能家は飯能の資産家で、東京に置かれた本店（本社）はその後飯能に移されていく。

開通以来、飯能を中心とした経済と、りわけ物の流れが変わり、従来川越を中心とした経済圏が存在していたが、大正12年の入間郡役所の廃止なども相まって、武蔵野鉄道沿線の経済圏という変化が見られるようになった。また、文化の面でも大きな変化があるが紙幅の関係でここでは触れられない。この鉄道は、昭和21年11月に西武鉄道池袋線となり、沿線の経済、文化産業の大動脈となつている。（理事）

飯能戦争についての 新たなイメージ

「特別展「飯能炎上」の成果から」

尾崎泰弘

はじめに

平成23年10月16日(日)から12月11日(日)まで、郷土館で特別展「飯能炎上—明治維新・激動の6日間—」が開催され、期間中7、260人も来館者があった。この展示に対する反応を見て、筆者がまず驚いたのは飯能戦争に対する市民の関心の高さであった。飯能戦争は、日本の歴史全体の動きと直接関わりのあるものとして、これまでもまとまった著作が記述がなされてきた。本稿では、これまでの研究の基となった史料を整理し、それらと比較することによって、今回新たにわかったことをおまかにまとめておきたい。

1 飯能戦争研究略史

飯能戦争についてのまとまった最初の記述は、第一飯能尋常高等小学校の校長であった吉田肇吉による『飯能戦誌』である。これは、飯能戦争からちょうど70目にあたる昭和12(1937)年の振武軍碑建碑活動に合せて著されたもので、昭和8年に吉田が著した『飯能戦争の梗概』の記述に、明治42(1909)年に出版された尾高淳忠の伝記『藍香翁』の内容が加えられている。

次に書かれたのは、昭和19(1944)年に発行された『飯能郷土史』(飯能国民学校発行)である。この本は紀元2600年を記念して計画されたもので、執筆は同書の編さん主任である富澤実及び同校の地歴部員による。同書の発行は、吉田肇吉の郷土史研究に影響されたものであった(同書・富澤実による序文)。(1988)年、飯能戦争に関する研究成果が相次いで発行される。すなわち新井清寿の『飯能戦争』(はんのう文庫④・飯能郷土史研究会発行)と『飯能市史 通史編』である。前者は、昭和61年に文化財時報第94号に発表された加藤義雄文化財保護審議委員(当時)による飯能戦争に関する新出史料を、また後者は能仁寺文書や赤沢村浅見家文書など、自治体史編さん事業の成果をとりこんで執筆されている。

2 飯能戦争研究の基となった史料

先述した飯能戦争についての研究がどのような史料を基に描かれているのか、それを一覧にしたものが表である。この中には、現在所在がわからなくなっているものもある。平成24年3月に当館では『飯能戦争関係史料集』を発行したが、そこでは史料を、①振武軍が通った地域の記録、②戦争当事者の記録、③戦間地域の記録、④日記・風説留、の4つに分けて掲載した。それと比較すると①がなく、②の新政府方と④が少し増えている。逆にいえば、今回の

調査で、振武軍が飯能に来るまでに通った多摩地区を中心とする地域の史料と、新政府方及び風説留に新出の記録と本市区に遺っている史料はこれまでのもので外には見つからなかったというところである。ただし、ここでいいたいのは今回の調査の成果を強調することではない。現在は、各地で自治体史編さんも進み、多くの古文書が調査、目録化されていく、インターネットやPCを使っての検索も当たり前になってきている。このような環境下にあつて初めて可能になったわけで、かえって情報が少ない中で研究を進めてきた先学の業績こそもっと評価されるべきと考える。

3 今回の調査で新たにわかったこと

今回わかったことは大きく2つの点である。1つは、飯能戦争で新政府方と戦ったのは振武軍だけではないこと、そして、1つは、新政府方の主力は、江戸か

ら青梅街道を経て扇町屋に集結した、大総督府下参謀渡辺清左衛門に率いられた福岡、久留米、大村、佐土原、備前の5つの藩であったことである。これまで、振武軍の行動を示す資料は、洪沢喜作(成一郎)の回顧談が中心だったため、飯能に至るまでが不明で、しかも振武軍ばかりがローズアップされてきた。しかし、小平市立中央図書館所蔵の小川



特別展「飯能炎上」展示風景

郷土はんのう

家文書(東京都指定文化財)中の慶応4年「御用向控帳」などによって、振武軍が田無に屯集してから箱根ヶ崎を経て江戸の様子が、再び田無に宿陣するまでの様子がかみ詳しくわかっていた。実は、上野戦争の後、5月16日から17日にかけて、田無には振武軍以外にも旧幕府方の彰義隊、臥龍隊、旭隊などの敗残兵が集まってきていて、この時点で旧幕府方は大将不在の鳥合の衆と化していた可能性がある。また、振武軍は上野戦争前の5月11日に、箱根ヶ崎に移る時に途中の小川村へ昼食と休息の場所4カ所の用意を申しつけているが、そこから振武軍は300人ほどの規模で、しかも大きく4つの隊で編制されていたことがうかがえる。ちなみに「高岡槍太郎日記」では、前軍中軍、後軍の3つのほか、「会計」と「軍目」という組織が出てくる。

また、これまで新政府方の史料調査が進んでいなかったため、ともすると飯能を攻めたのは、川越からやってきた福岡藩と川越藩で、指揮したのは福岡藩士で軍監を務めていた尾上四郎左衛門と考えられてきた。しかし、川越から来た諸隊は、むしろ東と南から侵攻した本隊との戦争後の、敗残兵の掃討が中心であったと考えられる。ちなみに本隊を率いた渡辺清左衛門は戊辰戦争で軍功をあげ、のちに福岡県令、福岡県知事などを歴任し、男爵にも叙されている。

以上、これまでの研究史の整理と今回の調査によって、飯能戦争像に修正が必要と思われる点について簡

単にまとめてきた。これはあくまで筆者のイメージでしかなく、新出の史料については、『飯能戦争関係史料集』にはほとんど掲載したので、それらをご覧いただき、ご批判をいただければ幸いです。(郷土館学芸員)

飯能戦争についての記述で使われた史料一覧

No	史料名	出典	戦誌	郷土史	飯能戦争	市史	分類
			昭和12	昭和19	昭和63	昭和63	
1	「飯能辺騷擾日記」(飯能青蠅)	東京大学史料編纂所蔵	○	○	○		②
2	振武軍廻文	横川竹男氏所蔵	○	○	○		②
3	碑「唱義死節」	能仁寺					
4	渋沢喜作談話	「藍香翁」	○				②
5	双木日記 不明			○	○		③
6	「大砲玉箱」箱書	双木利八郎氏所蔵		○			③
7	智観寺「戦争体験録」	「武州高麗郡中山村記録」		○			③
8	高岡槍太郎日記	「日本医事新報」No.2296			○		②
9	双木家文書「御振武軍様御出張判取」	双木利夫家No.					③
10	須田家日記(「辰日記」)	須田省一郎家No.25			○		④
11	福岡藩戦争届書				○	②	
12	福岡藩「綱領」				○	○	②
13	太田資料	福岡県立図書館郷土資料室所蔵			○		②
14	久留米藩届書写				○		②
15	曾久吹風「新聞集成明治編年史」				○		④
16	飯能戦争之事				○		②
17	渋沢平九郎の碑	法恩寺					
18	双木家「乍恐以書付御届ヶ申上候」					○	③
19	能仁寺「乍恐以書付御届申上候」					○	③
20	振武軍廻文(名栗谷)	浅見譲二家文書「卯辰日記」				○	②
21	此花新書					○	④
22	乍恐以書付御歎願奉申上候	浅見譲二家文書か?				○	④

・飯能祭り囃子の源は
飯能祭り囃子は何処から来たかについて話します。お囃子は、小太鼓、大太鼓、鉦、笛に踊りがつく形態です。葛西神社の葛西ばやしが大元になっていきます。それが神田に伝わり、蔵前、佃島の囃子が江戸時代の主流になりました。神田明神や川越の型が「山車」飯能では他の多くが「屋台型」の山車です。

昇殿、鎌倉、国固め、神田丸、四丁目、にんば、屋台ですが、ほかに秘曲として亀戸、皆伝などがあります。夏まつりにやるキリンなどは秘曲と言えます。これはあまり披露されません。飯能では亀戸やキリンを二丁目親和会さんがやります。神田囃子大橋流、小田原若狭流があります。神田囃子大橋流を名乗っているのは下知上知、二丁目、三丁目、一丁目、双柳、坂石町分の七カ町です。新久から下知、二丁目、三丁目へと伝わりました。一丁目、双柳は仏子から伝わりました。曲目「屋台」一つを見てても町内によってちがいます。まず地が丸めです。スケテン、スケテン、テンツツツ」下知から二丁目に伝わった時に何か起きていると思われる。新久と仏子一山越えるわ

邦楽と飯能地方の
祭り囃子
石森裕也
(東京藝術大学邦楽科邦楽囃子専攻)

けですが、山を越える時に変わってしまったり考えられます。スケテン、スケテン、テンツツツツになりまし、屋台という曲の吹っこみ、地、切り、中入りに関しても一丁目双柳とちがいます。

中入りの中に岡崎がありますが「岡崎女郎衆は綺麗だ」から来ていると思います。岡崎は一丁目、双柳にはないのです。下畑、二丁目、三丁目にはない曲が一丁目、双柳に現れました。それは「新獅子」です。

これが「一丁目、双柳にあります。新しい獅子を作ろうとして作ったと想像出来ます。「スケテンスケテンテンツツツツ」です。下畑さん、お座敷ばやしと言うくらいですから、神田大橋流はゆくりしています。

仏子、新久は喧嘩ばやしといわれています。仏子、新久にある「スツテツツツツツツツツツツ」は飯能にはないので。私が考えたことは、もしかしたら

隠岐流に近い神田大橋流かもしれませんが、一丁目、双柳には三番叟がありませんが、下畑、二丁目、三丁目にはありません。なぜ、神田大橋流に三番叟があるかですが、仏子、昭和初期の山車に馬鹿面が写っていて、近くで良く見たら仏子では三番叟をやったようなのです。

仏子の師匠である新久に三番叟はありません。大正九年の写真の重流(じゅうりゅう)には三番叟があります。大正時代、所沢御幸町の三番叟を仏子が習ったか真似たのではないかということに最近気づきまし

た。ぐるぐるまわっている感じですが、そういう意味で「郷土芸能には正解はない」と言うのが実感です。その土地々々で正解、そこが郷土芸能の土地々々です。

・踊りに関して

踊りに関したことでありますが、飯能は何と言っても「外道」だと思えます。入間市の外道は牙、目が上を向いていて塗り替えてあります。金歯です。片方は笑っています。片方は牙が出ています。外道、人の道からはずれませんがさくるしんでいます。入間市のは、うって変わって人間になっている感じですが。

新久の外道は髻をして俵を持ちます。手力男ノ尊、力持ちを表します。飯能の外道は原町が良くやっています。が、岩戸を押し開く手力男ノ尊のごとく演じます。踊り方が伝わった違いは面白いのです。飯能独特のものかと思つたら、東京青梅にもありました。桃太郎、鬼の親分、鬼退治の鬼の親分が外道になっています。

入間市、力の強い男神様・新久から下畑、二丁目、三丁目入間市から伝わらない踊りがあります。それは翁です。

新久の翁は農夫でつらそうな顔をしています。飯能に伝わっていない踊りとなります。それから獅子の髯剃りは飯能で見られますが、新久にはなく、飯能独自です。坂石町分に「狐つり」があります。陽気ななんに「狐つり」が出てきます。狐にばかされ、狐の思うとおりになつてしまおうという筋です。南高麗の間

野にもありますが、今は演じていません。「住吉」が、若狭流にあります。扇子を使つて踊りますが、若狭流の独特のもので、原町、川越新宿町から、野田から習ったという説もあります。新宿町にはありません。扇子二枚を持つて踊ります。

その大元は里神楽のようです。いざなぎのみこと、女神黄泉の国に行つてしまいます。川で身の穢れをばらおす、からだを洗つていた時、体の垢から住吉三神、黒式尉、御幣、そこぞつおう、扇子を二枚持つている、何を表しているかと言いますと、海を渡つて来る様子です。神社の庭に向かう時の波を表しています。

たぶん若狭流が採つたのではないかと思えます。すつとんとんとん、この踊り方は里神楽を参考にしたのではないかと思

います。二丁目、柳原、宮本町には「もどき」があります。袴を着て踊ります。東京の里神楽、神様の従者として「もどき」の格好をしています。二丁目親和会さんが取り入れたようです。飯能にも神楽があったと思えます。もともとあった飯能の地踊りを残して行きたいと思つています。



・底抜け屋台

祇園囃子の底抜け屋台はもともと屋根自体は江戸にあったのです。屋根が一松模様や朝顔型があります。端唄、芸者さんがかつて唄をうたったのが底抜け屋台の始まりと思えます。飯能の底抜け屋台は日本全国でもこれだけ密集しているのは飯能だけのことです。飯能はもともと芸者さんが多かったからではないかという話を加藤義雄さんに聞いたことがあります。

・しゃんざり

しゃんざりは、仏子、新久にあつたかといふとありました。入間市は小太鼓ひとつ、大太鼓ひとつでやります。「シャングリ」「しゃざり」という入間市ではもともと四丁目と言っていたようです。小太鼓を大太鼓でやったのが始め、入り方「てけてん」です。町内回りの時泥酔して飲み屋さんに門付けし、寄付をいただく「はやくしろ」が起源と言われています。二丁目、一丁目どちらからか始まったと言われています。飯能のシャングリは付けが二人です。入間では止まると一人の付けです。一丁目では昔の話、名人三人いたとのことで、私の祖父入間では二人だが三人でやると格好いといふ、一丁目の人が榮業したようです。底抜け屋台で人をすだれで隠すのが入間市です。入間市は「底抜け」で

はなく、やぐらと言っています。やぐらまたはチキンドンと呼ばれています。実は「シャングリ」にも元があります。歌舞伎の「シャングリ」は紹介終わりましたよと言ふ合図では片しやざり、勧進帳で使います。偉い人が現れるときにこの曲をつかいます。「シャングリ」「シャングリ」石川県では鉦のことを言っています。あるいは「砂を切る」佐原大祭(千葉)でシャングリがあります。篠笛を吹きます。てれんどん、てれんどん：全国には多いのです。なぜシャングリという名になったかを調べてみたいと思っています。

・おわりに

伝統芸能を専攻している人はいるが、長唄、琴、三味線、狂言が主で郷土芸能を専攻している人は少ないです。能であつても、もともと京都の観阿弥、世阿弥の曲も郷土芸能だったかも知れないのです。ももとの時代のことを忘れてしまった。郷土芸能をもっともつと分かってもらいたいと思っています。以前、飯能の仲間と郷土芸能をやりました。大学の文化祭で神楽の地位を上げる努力から硬い感じになってしまいました。ももともとも神楽も芸者から始まったものです。神話物をやったのです。芝居がおもともとなっていました。伝統芸能と郷土芸能のどこがちがうのか、その疑問を解く努力をしています。郷土芸能を大事にして

行きたいと思っています。来年一月にコンサートをしたと思っています。長唄、津軽三味線、笛、コントラバス、和楽器などを組み入れた演奏をしたいと思っています。長唄あり津軽三味線あり自分が作曲したものであり、郷土芸能あり、そう言うコンサートにしたいと思っています。これで終わりたいと思っています。飯能が多かったと思っていますが、ご理解いただけは幸いです。

(H23年6月18日・例会講演録)

洪川市赤城町の文化財探訪

浅見初枝

八月の県外研修は群馬県洪川市赤城町に決定した。参加者9名は台風12号などの影響で天候が心配されたが、8月26日(金)8時にバスで飯能駅を出発した。

講師は洪川市文化財調査委員、日本石仏協合理事でもある角田高士さん。最初の見学地赤城町宮田の宮田不動尊の前で待っていてくださった見学を始める前にバスの中で資料の配布とこれから見学する赤城町の文化財の概要の説明がある。

①宮田のお不動さま

国指定重要文化財、石造不動明王立像を目指して歩き始める。古くからあると思われる石段は狭く、でこ

ぼこして両側に並ぶ巨木が神聖さを感じさせる。通常は開扉していないのだが角田さんを含む世話人の方々の好意で特別に拝観させていただく。不動明王は、拜殿に続く岩窟内に安置されており、岩窟の左手に真白いお不動さまを拝んだ。この不動明王は凝灰岩の石英斑岩で二石を彫り方にして腰部で合わせるといふ手法で造られた。この像高166センチメートル弁髪を左肩に垂らし、右眼を見開き左眼を半ば閉じて口を真一文字に結び、左上と右下に牙をだしている一目掃視の憤怒相。右手には剣を掛け左手には羂索を下げている。腕には臂剣と呼ばれる腕輪を首首には腕輪を付け、左肩から条帛をかけた腰には裳をつけて岩座の上に力強く立っている石造物の傑作とされる。下半身の上面に建長三年七月八日(1250)願主掃部権助朝臣代祝。仏師定調流造之僧院隆。僧院快(祝)の墨書があるという。お堂を開けて下さった世話人の方々にお礼を申し上げた見学地へ向う。

②津久田 福増寺

福増寺は曹洞宗で広大な境内に禅寺の七堂伽藍があり正保元年開山(1664)とされ、経蔵、鐘樓を受け本堂だったので、三門、経蔵、鐘樓、本堂、開山堂、書院、庫裏、土蔵等が完備し近郷にない偉容を誇っている。このあたりから雨がポツポツ降り出した。急いで亀甲張りの参道を下り万雲水の脇に立った大きな青面金剛石塔を見学する。信州高遠の石工伊藤新助作(245センチ)で県内

最大、邪鬼を踏付け二童子を従え剣と弓矢を持ちがっしりと立っていた。

③津久田 赤城神社
本殿の彫刻は江戸時代中期に上州で一大勢力圏を形成した中心人物間口文治郎の作で、繊細、優美、渋川市の指定文化財になっている。境内に

固定式農村歌舞伎舞台がある。このあたりから雨は本降りとなり、バスの乗り降りに手間どる。

④津久田 桜森(通称上の森)
津久田上の森八幡宮の境内に約百本ほどのキンメイイチクがある。別名メジロタケといひ節間の枝の生じた部分に黄金色の縦縞が交互に出る色合いが美しく



上三原田歌舞伎舞台の前で記念撮影

珍しい。真竹の変種で国天然記念物となっており、ベニタチヒガンザクラで枝垂れないのと花の紅色が濃いのが特徴。樹高12メートル、目通り4.8メートル、樹齢400年と推定される。また敷地内の人形舞台は萱葺寄棟造(現在はトタナ被覆)開口2尺の舞台で両脇にはガンドウの機構があり舞台奥の床は前面の床より2尺6寸高く広く活動できるよう工夫されて

いる。文化八年(1812)の建築で日本最古の農村歌舞伎舞台。人形芝居を始めたのは享保八年(1723)角田一族により始められ、人形の頭は38個あり建物供々県指定重要有形民俗文化財となっている。残念ながら近年上演されたことはなく人形の一部は赤城歴史資料館に保管展示されている。

⑤津久田・六万の三面馬頭尊

墓地の入口に立つ憤怒相の大きな三面馬頭尊を見学。中越地震、東北大地震にもヒクともしなかったという。

⑥赤城歴史資料館

旧石器時代からの石器・土器類、民俗資料が展示されている。館内は考古展示室・民具展示室・民俗芸能展示室・企画室に分かれ収蔵品の多さと質の高さは県内屈指の資料館と評価されている。

⑦滝沢の湧玉と遺跡

国指定史跡・滝沢石器時代遺跡は赤城山西麓の舌状地に立地し、旧石器時代、縄文早期・晚期・弥生・古墳時代にかけての集落遺跡。大正15年(1926)に小規模な発掘調査が実施され三軒の住居跡と配石遺構が発見された。以降現在でも調査は続いているとのことだった。出土品の多くは赤城歴史資料館に保管されている。遺跡の北東隅には湧玉と呼ばれる湧水があり当時から生活用水として利用されていたのだらう。豊富な水が流れていた。中央に弁財天の石祠(寛政六歲宿甲寅六月吉日1794)が祀られている。ここまで見学して少し遅い昼食。上州そば

を堪能し、午後の見学。雨は小降りになっていた。

⑧上三原田の歌舞伎舞台

赤城町上三原田に生まれた水車大工永井長治郎が故郷上三原田の地天竜寺境内に文政二年(1819)に建築したものを明治15年に現在地に建築した。板壁を外側に倒して舞台を広げるガンドウ返し、奥行を深く見せる遠見、回転機構、せり上げなどの特別な機構がみられが国唯一の農村歌舞伎舞台として珍重されている。現在でも上演されていて多勢の人が集まるとのことであった。

⑨小室の郷蔵

渋川市指定文化財で飢饉に備えて食料を共同で備蓄しておく倉庫を見学

⑩東京電力佐久発電所

バスの車内からサージタンクを眺める。

⑪八崎・豊安寺

市指定の一石六地藏石板天文十三甲辰四月二十一日(1544)は寺の内に安置されていて写真のみであった。境内の日待ち塔(三光天子供養塔)宝篋印塔、双体道祖神などを見学する。

⑫八崎・日向口綱笠さま

委神 明治十八年西三月十五日建立(1885)群馬県内に41基あるうちの1基。他に双体道祖神、庚申文字塔を見学する。

以上で見学は終り熱心に案内してくださった角田さんとお別れです。多少雨に濡れたものの無事飯能へ到着した。すると西武線のダイヤが乱れるほど飯能は荒天の様子だった。(会員)

浅草観音発祥の地 岩渕・岩井堂観音

小見山道

「浅草寺のご本尊は、埼玉崇徳能市岩渕の岩井堂にあった観音様だ」という話が昔から入間川・荒川流域で口碑伝承されてきた。

岩井堂観音は約1400年前、1人の旅僧が木彫・金塗の観音像を携え、岩渕の地で靈感を得、観音堂を建立し、村人に「願えばかならず功德が授かる」と伝承した事が始まりとされている。しかし、大暴風雨に遭い、観音堂・尊像もろとも崖下の成木川に転落、観音像を流失した。

一方、浅草観音の発祥は、推古天皇三十六年(628年)三月十八日、江戸浦(現在の隅田川)で捨前浜成と竹成兄弟漁師の網にかかり、翌日から大漁が続いたことから祀られ、観音像とされている。(浅草寺縁起)。

この噂は早速、岩渕に伝えられ、岩渕の代表者が浅草に出向き、岩井堂観音であることを確認し、返還要求を開始したという。

岩渕からの返還要求は何年も行われたが通らず、観音像は信奉者が増加するとともに観音堂が建立され浅草寺の開山となった。大化元年(645年)に勝海上人は夢告により観音像を秘仏と定め、以来今日までこの伝法の掟は厳守されている。その後江戸時代まで岩渕の人々は、かな

らず年2回お彼岸の時期に返還要求を続けていたと伝えられている。

年は下り、明治元年の廢仏毀釈により、浅草寺も秘仏の開扉が迫られ、観音像が政府の役人によって確認された。その時の秘仏の観音像の写絵2枚が昭和8年(1933年)5月

浅草寺に持ち込まれた。その写絵が岩井堂観音と浅草観音との密接な関係を示す証となつたとされている。(岩井堂観音には「龍岡沢」の銘があり写絵に「龍岡沢」の文字があつたのではないか?)

その写絵を見た当時の執事長(後の浅草寺第24代貫主)清水谷恭順師は岩井堂を訪れ浅草観音の分身を授けると申し出た。

昭和8年9月15日、浅草観音の分身となる聖観音菩薩像が奉還され、清水谷恭順師により入仏式が盛大に舉行された(昭和8年9月16日東京日日新聞報道)。

さらに、岩井堂観音を浅草観音の生地として「浅草寺の奥の院」としたい旨の申し出があつた。

現在の岩井堂観音は平成22年1月1日にNHKラジオ深夜便「浅草観音のふるさと伝説を探る」で放送され、「浅草観音発祥の地」として、埼玉新聞・文化新聞・飯能青年会議所「はんなら」・JAいるま野機関紙「いるま野」・飯能日高テレビなど多くのマスコミで報道され話題を呼んでい。そして飯能郷土史研究会を始め南高麗公民館・加治公民館・エコライフ飯能・飯能初雁会(川越

高校同窓会)・駿河台大学など市内各地で勉強会が行われた。埼玉崇徳とJTBの共同企画「埼玉体験旅くらぶ」で「浅草観音のルーツをたどる旅、飯能市でエコツアー」を取り上げて、飯能市ではエコツアー「浅草観音のふるさとを訪ねる旅」を実施している。

また、沢辺浄庵飯能市長・和田浩埼玉県議会議員・新井景三飯能商工会議所会頭・市川章弘飯能市観光協会会長の各氏が浅草寺を表敬訪問し「世界的に有名な浅草寺と飯能市が岩井堂観音を通じて縁がある事は飯能市の誇りです。是非、飯能の観光振興に力を貸して頂きたい」旨をお願いした。

一方、地元岩渕では毎年「浅草寺参拝団」を編成して浅草寺を正式参拝している。また、平成の大嘗筈(本堂・大屋

根・御宮殿)が竣工した浅草寺は、東京スカイツリーの完成で益々活況を呈しており、飯能からも飯能商工会議所青年部・南高麗公民館・明治神宮崇敬会など多くの参拝団が訪れている。

今後は岩渕を中心に「岩井堂観音奉賛会」的な組織を立ち上げ、飯能市・埼玉県・西武鉄道などの協力をいただき、岩井堂観音の駐車場を始めインフラ整備に取り組み、より多くの参拝者をお参りして頂ければと願っております。(理事)



岩井堂聖観世音菩薩(入子助蔵氏提供)



岩井堂観音

〈随筆〉 街路灯散見

関根貴志

私の好きな街路灯のことを少し書きたいと思う。

(写真1)の場所は東飯能駅北東の線路沿いの道沿い、君塚医院の敷地内で、ここに「飯能中央通り」と銘打たれた街路灯が立っている。もちろんこの道が中央通りである。もちろんこの道が中央通りで立っているのではなく、かつて中央通りに立っていたものをここに移設し、再利用したものと思われる。支柱には「東京立川 東洋コンクリートK・K



写真1



写真2



写真3

TEL立川 二九五二番(写真2)」という記載があり、支柱を製造した会社だろうが現在では存在しないらしく詳細は分からない。
この街路灯がもともと中央通りでいつ頃使われていたのかということや、移設の経緯については未調査のためよく分からないが、高さも現在の一般の街路灯よりも低く、相当に古いものと思われる。電話番号が4桁だったころを調べればある程度絞り込めるだろうが、飯能に現存する街路灯の中ではおそらく最古の部類のものではないだろうか。
この街路灯は飯能のあちこちに移設されたようで、これまで目視で確認できたものを挙げてみる。ただしこれ以外にもかつては存在し、私が確認する前に消えてしまったものが少なからずあった可能性はある。
・天覧山のニコニコ池のほとり(電灯が二個の双頭型)
・郷土館西側の坂(支柱だけ残っている)
・NTT双柳支局の敷地内東端の交差点に面したところ(撤去済み)

・清川橋北側の道端
・「第一小学校裏」交差点の北側の路沿い(5本立っていた)
・原市場地区に多く見られた。
・原市場中学校前の通りの駐在所や民家の前などに3本あったが、この十年ほどのうちにすべて撤去されたらしい。
・交差点を妻沢方面に入ってすぐのところ(2本あったが、1本は無くなり、1本は途中から折れたものが峯の瀬橋の傍に立っている)。かすかに「飯能中央通り」とよめる。白髭神社の東側は名栗川の左岸になっており、すぐ下が崖に立っているような道だが、なんと道や駐車場の土留めに使われている(写真3)。これは当地での運用を終えた後での、いわば第三の人生を遂げていると言えよう。このまま未永く形をとどめてくれば良いなどと思う。

うのがほとんどである。(まれに撤去されずにその場に残留するケースも見られる)。この「中央通りの街灯」の支柱はコンクリート製であることと、その意匠ゆえに廃棄を惜しまれたのかもしれない。ひとつの文化遺産には違いないので今残っているものは大事に保存されてほしいと思う。

この稿を書くにあたり確認したところは、君塚医院に立っているものは現役で稼働中だった。馴染みのあるものが次第に無くなっていく中で、これは嬉しいことだった。(理事)



移設前の露座の板碑（原市場房ヶ谷戸）

西光寺跡地の山側段上に、長い歳月、このような姿で建っていました。右端の板碑は真中から二つに折れていますが、飯能市域では一番大きい板碑です。いつ、どのようにして破損したのか、またどのような人がこれを建てたのか、750年の空白をうめるものはなにもありません。

飯能郷土史研究会の活動

◎平成二十三年度事業報告

▽総会四月十六日(日)

講演会「飯能の石塔について」

—調査成果から—

講師 村上達也氏

(郷土館学芸員)

▽例会

●六月十八日(土)

「邦楽と飯能地方の祭囃子」

講師 石森裕也氏

(東京芸術大学学生)

久下文男氏

(理事)

●八月二十六日(木)

見学会

「群馬県赤城山麓の文化財」

案内 坂口和子氏

(会長)

●十月

特展「飯能炎上」

郷土館事業に協賛

●十二月十七日(土)

「武蔵野鉄道」

講師 浅見徳男氏

(理事)

●平成二十四年二月十七日(土)

「やさしい仏像の見方」

—石仏を例に—

講師 坂口和子氏

(会長)

●三月三十一日

(日本石仏協会会長)

郷土はんのう三十二号発行

◎平成二十四年度事業計画

▽総会四月二十一日(土)

講演会「本物の世界」

—玉堂と比庵—

講師 清水保夫氏

(青梅市美術協会元会長)

飯能市原市場出身・青梅市在住

▽例会

●六月十六日(土)

「近代兵法と飯能戦争」

講師 佐山二郎氏

(火砲・軍事技術史研究者)

●八月二十四日(金)

バス見学会

筑波山周辺の史跡探訪

●十月

特展

「飯能の山岳寺院」

郷土館事業に協賛

●十二月十五日(土)

「山岳信仰と修験道」

講師 大野邦弘氏

(副会長)

●平成二十五年二月十六日(土)

「聖徳太子伝説と法隆寺」

講師 須田 勉氏

(国士館大学教授)

●三月三十一日

郷土はんのう三十三号

新会員 渡部圭一氏(所沢市)

お悔やみ申し上げます

新井五助氏(理事)

H23.11.3没

編集後記

大震災と原発被害の報道に明けくれた平成23年、月日の経つのが異状に速く感じられた一年でした。

郷土史研究会の活動は予定どおり開催することができ、郷土はんのう32号も各氏のご寄稿をいただき、新しい話題を提供することができました。会員皆さまのご協力に感謝いたします。6月の定例会には東京芸術大学でお囃子を専攻されている石森裕也さんに講話をお願いいたし、その講演録を掲載いたしました。録音などもあり臨場感たっぷりでしたが、誌面では再現できず残念です。郷土館特別展「飯能炎上」は身近なテーマで興味深く、その成果として尾崎学芸員さんにま・とめをお書きいただきました。郷土への関心が深まることを願っております。

(坂口和子)

郷土はんのう 第三十二号

発行日

平成二十四年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会

〒357-0121 飯能市中藤上郷四一三

(岸道生方)

電話九七七一〇六五四

題字 大野邦弘

印刷所 (有)ビィ・ユースフル